



三省錄

後編

三

25

9  
3780  
8



9  
3780  
8

三省録後編

原義輯

住居之部



居宅ハ富貴なる人ハ分限より少く狭きと名ゆるの理ニカ  
 りあるを以て其時あるを以て春樹秋ニあり  
 て志ハ圓月十五夜とてかくるがごとく天地の理皆あ  
 り此がごとくあるを今富貴より居所心よりせ作らざり  
 とも遠慮を有れども後を修復力もなく破を換へ  
 浅きを多く見ゆふを以て壯年のあるを以て富貴身はあ  
 かり屋はくさるるなり多し一人も一生を乃富をを  
 毛のりとあつては老境膝を容る所もなくあり一人をを  
 眼前幾許といふ數と志らば天道虧盈而益謙地道虧盈而

下一



流謙鬼神害盈而福謙と聖人の曰くなれど物おとるより  
るりくつり不足とゆゆへとらるを樂むべき程ならん花  
を半開に見酒を微酔は飲と古よりいひ侍りなり殊に武  
士を居を安ずべきありあらざれば於けら心を用うべきあり  
然れども一郷軒を逐べ一中は居宅甚くやぶを換じても人  
他郷の人れえり目も其所のうれきまのつとごとく然ら  
むるやうよええあきく一さもれたれば外見ありらば  
むどよとふむべし外面ハ見えなく内よあばあさこのむ  
ハ理よりむきくるむべし物て家と作るよ異やう事案と出  
のむをえり目もくもくくいとさむひくくまの時の間け  
むアともなるまんと兼好ものことさうま  
尚儉撮要



○大猷院様御代上方にて傳奏公家衆より々々を此度江戸へ  
下向し見申の支所城外は大猷院出来は大小名は下  
郎より雨風を凌ぎ將軍は仁風勝せて相見え申は禁門  
の外よりあはれむく腰懸を志つらひはけ守御舎人の下  
部も露粟れむぐらひ望之はんと存はまはるおまはる  
右のぐく仁の道とおはは況や身もすそ川のすめは代  
つであらんとは違ひ申上るなや実そくや思合らん其  
被付付禁門外より獲けけ出来しうたりそはせの諸司  
代板倉用防のハ所用に付江戸表へ系勤しう上方よふ有  
合其後よまのへり右は腰かけをえて大まよあされいふ  
おもひる人侍奏と家衆ハへり日りなく夜中大勢ハ入部

と召つて周防守下知し〜く〜く打らねち仕廻りも  
公家武家をするふ〜災の根元といふまより板倉はく  
そのらひひふ〜や此常此人〜も周防守が思ふは〜  
〜〜誰一言是を咎めふ人なきありしとや 明君享保録

○同一所代朝鮮人來朝登城前所擧の白土落しを増上寺に  
成い節上覽還所前白土を付はせりや 松平伊豆守  
信綱は被仰付信綱承之外の信擧此戸を〜を立替て  
由は當信方のなり〜社中付はと土井大炊頭さ〜ひ夫  
豆州よ〜のぬ作言〜は所大明〜不成る〜と  
中傳と志る〜めさ〜は〜い〜多〜る〜が〜い〜急〜は〜代  
と社中付の然り〜自分よハ香魚是り〜る〜急〜を擧

働も出は得ども外の者〜被仰付は時誰も此働も不及り  
之ハ不調法を〜より〜被里召し〜ハ其人も立〜く〜はと  
社中〜伊豆守ハ尤の事〜也〜ひ〜玉極感入は信綱  
を某一生此心掛けよ〜社中〜 柳營故諺記

○ちうさ頃青山故大徳亮殿ハ生乃質素なる人〜よ〜めり  
志らざる人のや〜よ〜えは〜ガ或時外より〜ら〜  
役人どもを〜誰彼此宅〜系り玄園を〜手  
〜自由も〜えは自分屋敷玄園ハ〜外セ〜  
いよ〜通ひ〜思ふあり大工〜も入用を〜  
〜えは〜第〜と〜付ら〜ハ役人とも常〜志  
〜風を存〜た〜直〜つ〜らせ金八兩〜出来

以申と書付居出やれと大膳殿はくく見らせりややく  
望周といふは八あと中争子日そ八足極き人を扶助す  
るべくそとて普請をやられしより然るは尾崎居城の最  
大坂の市堀出火よつさ江戸早退の使者を以て注進中は  
是の時あるは使者を目通り近くよひ出膝の例は小粒  
金を紙よを包みおきて兩の手よすくひて定めて手前役人  
とよより中付はん是ハ自分ガやるごとく其をば右に  
袖へ自分入らるの男も伏して退んとりてははまなく  
と中はたいてまふ兩手よ一すくひ左の袖へおきられしより  
あ人一同振よ回すくひるまはりは付あ人も一入のりだけく  
な一道中心もげらして江戸に仕違き番よ若く其後

○大膳亮教系府の最規模なる上意も有えはより具より  
不影玄園よ置付の長持ひとつあて内よ金千兩とてこの金  
より入坊の銀を封巾もあく當番の廣間番代り合の  
時分蓋をあけ見はまでより受取やする海より承  
傳へ君上の心持は此所をよりく心得て中へなるべし  
となり 嚶鳴館遺草

○臣民家國の中は任申はてうと人々家内よするあはやう  
るも此は由実の家と中せは誰も彼もよた家よ老位よりあ  
しき家よ八極くは由実はして其家ハまづ棟うらむりハ上道  
具程かゝる戸障子屋派などハ中乃々縁が居新づく土  
臺廻りをも下乃々由実は然る如何ぞより上中下は道屋

材木よりくくも上屋根と申物せしめて一日も雨露  
の凌ぎハ有りふ中仍之上中下此材木ハたぐひひびきむ此  
き者やさきと此上材もくも上や祿が雨をりいり一はを二  
村とも多朽腐里中の少く柱ハゆるい戸障子ハ破れ換トハ  
ても上や祿さへ丈夫よはハ其家よ住るやハ然るゆえよ上  
屋祿をあるをけ丈夫よい多一たくのやぶきよりそよ一  
ぶさよりぬふよりいあたりふさすらよりい瓦ふさ其  
瓦七綱がらよはハいつすもくも破れかれ心づひもせら  
い主夫ハこれ上屋根より中坐は家老用人諸役人諸頭士  
ハ上中下の諸道具より出坐は 同書

○魯嚴公桓宮の楹小彩色一楠彫物せんと匠師の慶と云

人云々るも君の先祖君ハよく儉約を切なひく偽を楚  
ト後人よ法を造しゆゆ急よ久く福を多しり然る  
は今君偽を有りぬり君よ益をされたりは先祖の令  
法でもすいせあんといよめたるも有り 尚儉撮要

○靈王章華之臺を造るに伍采とよみ臣ともも登王を美す

るのなとほめられし伍采云々るを國此君とく賢人  
を重し氏を安んずるを樂とく法ある人此法を能用の  
を以て能く遠きところの人やてもよくまづくる故に  
明とく其臺の言く樨の彩とり楠此言さるちり免る  
と美とするこくを同す今君は老を作し國民つる是用べき  
千穀やふせ百友日づらハ一國奉て是を切め教年より

くす子うち来る目よあわく見るくらハみふれども是民の  
利をあつゑて以て自ら尅くく瘠民也故は是を美と譽ん  
やと此忠諫國語に見え多り

○権現様駿府に被遊あそび坐ま菅野くさのに倚たい砌板倉内搭正こしんご（由身後社  
倭としと被依出いハ我亦わが廟所むらじを將軍より被中付なかつはあてハ  
始祖しそ結依むすをいハとの依を以て定て作事つくホと結搦むすよ中付なかつハ  
一いどそ夫ハ世用の事ことよハ我亦わが子孫こそんよ玉り代かくとも始祖しそ結  
廟むらじに塔たらぬやうよある勸戒くわんがいの多めりもろく百世ひやくに傳たるを以  
て怪あやまな居ゐりし一被遊あそび坐まの由よしとあり下畧げりやく 神徳集

○鴨長明鴨のちやみひん云一二所を伝つたへりてある家とて七ななつをいりと思おもひ  
ふらハせる人ひとやこそあさましくハわろ才さい此これ也なりと云

ハ一二百ひゃくにふたひゃくよすぎたはあハみま志し一いきりともさ人の多おほく  
ろの多おほく一ハ神かみらよすむ屋やさう一馬うまのきりをはははく  
り坊ぼくよハあらばやのや一いまよ一いまよオをおづらり一いま  
るをくる一いま一日子ひこよあらん一いま一いまよ村木むらきをえらびむと  
ぶつぶつをえらむと一いま一いまよ何なにのせんハあるまは  
しめちあぶまればすむと一いま一いまよハ他人たにんのすむと  
とをりあるハハ風かぜよやがれるよくらぬいもんや一夜いっや火ひを  
出だすぬぬ一いま一いまよ片時かたときのあひぶよ一いま一いまよ書かけむりと  
なりぬるを也なりぬるを也 發心集

○見一ハむろむろ君きみ江戸えどハ内打うち入いりよりはうと怒いかり一いま一いまよ家いへ居ゐるく出  
来きりはれども皆みな子こやさうと燒や止やまま一いま一いまよ一いま一いまよ長なが六む

年霜月言此已の刻後何所々の下やう家より火城出す  
○此火焼らよ江戸町一字も残らば此寺の在位を所中  
ふきゆ急火子絶ずはいともいなるこの寺は序よは板ぶきより  
古れ層さより一は福あまれバ所へいづく板ぶきよ作る支  
二階山跡は兵衛といふ此諸人は秀で家を作らんと工  
之海邊地をくむより半分うらまで半分うら半分を  
板ぶきよ半分を皆人仕はくするハ本町二丁目のは山跡兵衛  
ハ家を半分うらうらまで半分をりはてもめづらうや奇特うな  
と人褒美して実名を半分跡兵衛といふはれ江戸うら  
ぶきよはけめなり古きよ瓦は松野の瓦うらうら瓦屋を  
後ざり瓦屋をうらうらやと心此うらうらよよせてうらうら

あり伴の跡は各所かんよすうらうらかりややまら古今異  
なす 老談一言誌

○関八州被達由急十が九つ小田原強塞此内は在任可有く中は  
るくうらうらよ秀吉と有世相達て武州江戸は在任とあり  
うは諸人騎さうは時の江戸といふハ東うらうら潮干沼  
若原うらうらうら屋敷といふうら八十所とも可割付と  
なり西南ハあり廣大は置系武蔵野は漬くうらうらうら  
ありなり其上二圍をも領や一人の居城まで方さよ急城  
ハ今此本丸中の内門より内よりあり西丸と名今二  
曲牆まで丸跡畧の跡ありなりハ此の大も此在任所と  
見えず然れどもは城と中ハ原正二年崩落上杉修程大吏

定政法長良太田傳中資長入乃灌高享年二十五葬武州  
品川北館品川を在るる重夢の昔ありて昔城を築き始む先  
東は浅草の大川ありて川船通國より若岸せむ南方を  
入海ありて東海北流をふ及中四國南海中流のまゆり  
船入津す平山城より見切よりあまの山近き山あり  
左磐昌玉極の勝地資本平日願の通り大軍北よりくるる處に  
名塚ありて秋武より終は長和元年四月八日經堂北  
東て本丸を移築新西丸を香月亭と名付是より在位す  
本丸北南東ありて失き誠は雙龍櫓をとりまへれ  
よ登りてみせを三國才一は富士を晴くして千秋の雪を  
留めすの築波ハ崎とくく美歳のきばくをゆく月を

名す北の武蔵野より二千里の外なるあり品川の歸帆築  
田北夕照隅田北長流真土北晴嵐厩前より元浅草寺北  
寶塔林同よりありつるハ遠き北晚鐘はれなりん見ぬも  
ろより西湖北景中より須六明石松島の眺望もはるる  
北より北より北資長流あり後上流北時は二音  
敷越よ進す  
あぢぢぬくしあぢぢぬくしあぢぢぬくしあぢぢぬくし  
赤庵ハ松ららとほく海ありてゆのたを新櫓をを名  
はてらそ富士見櫓と稱し早ぬ浪長出れより以前多く北  
城を築きさるるる昔城は常々不可及とよるるこびなる中畧  
のる如も不里保なる勝地ゆゑ

権現様八月朔日於小田原進發江戸に赴きぬ所々皆城  
儀局岡谷等あり九月十日は御城に移り入るる中なる所  
諸本此軍より小舟を以て地歌其旁なきるありしとて則ち城  
北西北と内藤室左衛門天野清右衛門を以て地割ありし  
岡谷土を引下し谷を埋め不日は成就し多ゆえは則ち大  
番倉相頼は此時より御家より外の御番になくて大番衆となり  
りたり依之番所と名付る所存置此軍ははやし所を多し  
りたりと日本武の言はれし八魔をとりし良財と名付せ  
るるとして岩城は鬼門の方本を産を御弓鉈の内と力同心  
ホるる中よりぬゆ弓所と云次よりは八丁堀邊御干潟は  
増除の堤を築て若糸の水を落しんぬありし舟入は川

とを掘せ其土を以て地形と物所を後割付て其上葉石以  
上は屋敷を多かりんばたらしやち若糸屋敷系八坂宮の真宅  
と變ぬぬありしは徳園社工高よりゆき来るより葉石より  
霧れどく霧のじり文王の御代よりやらんこれゆえは  
次才は五穀社若糸は坊もふより近在持運ひ登野城  
ひらき田畝とありしはこれ武蔵野ありし作毛の地と  
まゝめ五穀豊饒より氏其とをほりし山を八坂の  
ほぐ土地を度げ亭宅をいとなむ人もいたやすきな  
り云 續武家閑談

○むり江戸大嘗請はくさ人此家居もいませ定中は大名高  
宗此家友取しりりある大名やきはら

坊へけをる小屋へげをどして坊へける夏のよらんあひせ  
むきとくろは懼多くて拵ゆるふ 遺老物語

○西丸御厨詰替り八依久百将監よりあるり由書清大より出来  
しあらん

大猷院様御境の多め出御あり将監御供此中よあをいつな  
る平よりや丈之係者左衛門居合せぬれば善清足すと依り  
て拝見し誠は結搦あるは事よゆく中て後将監よりを見やり  
て解ハ甲より似せく元を堀とやらん其方が家だぐくり御  
厨を中付はぬ勿福吉此御城などよ八つらぬと八つひをがら  
御作法ハすくあるづきり此は略名をどハ甲此立物すくを  
繕きとせけとあげ中平八まりうひの筆一やの雪隠など

○見いひりガ才一つ分も這入のひいそがき時ハ具足若  
才より刀根ゆ一紐をりらうきもはいるも此をりそれ  
くがある習するぞく用持もなく云々ハバ 上様何と  
思召れありん何れ此よりいもなく桑へいらせりあり  
誰より傳つてや世世人のうりりとす傳へり 同書  
大よハあらぬりうすき左衛門のさハ大小よつきく  
分限あるを禱せりや

○台徳院様ハ茶道をよく好みあそびせ小堀寺にや考り照  
尺なる此人當時ハ京通とくく何よりよす持教寺  
ども格あまで決人此手本と茶子多く御教寺屋も遠江

その為分あり一寛永年中又由居る此領に所管の所建  
らるべしと遣江守に仰付らば此造作出來一上境有  
しと云ふは一向所定より叶はざりしはくつは茶屋のくみ  
ねにゆくよしと朝もいさく天井をくも物好るくつせ  
まれくよく大塚たることなるありく八里石は相違して  
く造り替られぬ張付するも砂子に泥引あり一越墨陰  
ましく四季耕作此形菓菜の類仰付られしとなり其所位は  
よりくお趣此物好るべきことなり心はる處しと云は  
此人種をく有り 明良洪範後編

○明暦二箇年正月十六日八時本郷六丁目西此く日蓮宗此寺  
本妙寺より出火し江守中より焼死ありお果は此

數十萬人取除く中系等之良く付下総國此内江戸さく本所  
村浦子川より一町ほど東(田地)のより五六拾百四方深さ二  
百ほど大塚れくくろくく死人埋中の其上道心若庵を  
ちくくく縁ちとすは度此死人川筋くく果はも此の境は  
ひくれ沖はゆき色玉浦く(流)はゆきさいも多きより無縁ちよ  
く埋中の系自分も在城見中のあをせなる辨見るめも等之  
以前代未聞此くくも有り同甲月たりめ此度款大徳役人由  
番倉中内を被下同所中焼死仕は家く表口割る口二百人全  
五ふあくよ被下並に諸人あをあげ難るくをめくく善法  
どといふ事一悦中夜志く生いも江戸中大名小名所中みな  
くくくやぶ事茶垣のくよは在いと見字といふ書よんゆ



致々る 續武家閑談

○高野大師の言に家ハ崇高なるハ惡一火災の害を不慮の  
ひきく依る家ハ怒昌一々永久ありとてその東寺は  
大師堂ハ麓ありひきくありなる故久しく火災をすぬ  
うらむりと云 栢窓漫筆後編

家云江戸下吾度迄此門を幾度の火災をすぬのせき  
々を向金く里讀も傳ふるおとくありぬるもあよ子細あ  
るよありず他も此門よりひきく至て栢好ありをえゆ夫  
ゆゑ火災を免一まうと云

○連袢袋柵とて今世ハ僧して氏百も設る家有り元來  
連袢ハ月郷雲窓の家は設ゆせのありありて正堂に入

あるれとて宮の冠と上の柵は玉烏帽子ハ下の柵は玉  
為は設らるゝそのとや袋柵とてそのとをせ多くも  
上るさそれをいせらるゝ柵は金枝玉糸の止んゝとさ  
所為はちりけらりそのと天子常此所調度ともを録れ  
ふくろり入らるゝ 別下の紙入とて それを天子入所の時所  
付况改に載る所ありある主設せり其袋を請取奉る  
彼袋柵は入るるとさりゆ急は冠り烏帽子の柵より袋柵  
ハ上にあるを菊搦所能のとき南殿の階上は柵は所見二方  
座中ハ上れちりくやそのとせらり彼ははさるなりと  
ぞして是利宗宗於は所所を立られりよ里公武混ト連袢  
袋柵を束は武家ちりくやけりよりつひは僧して氏百

は設るこくハ何るぞや袋棚ハ書画の油もれと白砂粒は相  
倍屋とあり連棚ハ糸のまらべ病はなうは並々と思へり  
東膳子

○鎌倉將軍家の屋敷造は宿角あり母屋廂中門廊中門侍遠侍  
などといやとそりありあると又之より築来れりも室町家の  
時より一變しつり寺院といふもれも古き出物ハ見えす  
玄園といふも途より下りて出末ありとまん今世は玄  
冥といふハは古法中門侍とやと坊といふ 小窓閑語  
○玄園と云ハむしハ古く足利時代禪宗より玄妙は入る門と云  
まよてまよなり古ハ玄園の上の廊下まで下路字履をくま  
てありぬ近く東坊といふ坊あり 古老人の物語り

開けり今池上本門寺よりぬはの古風跡あり 東海より  
ゆ玄園は古実器易の袴ハ伊勢氏四季字よりあり

○細川忠興ハ乃三言陣小屋を取盡しつる一百万は五百の小  
屋と云二跡ははくもやうは工支して出来す柱ハ榎木と細  
く一様を以て石突よ志のけ折ぬやうはありらへ上も四方も  
は桐油布あり在りハ勿論東京江戸もありらへ一並珠よと  
はうも油断なき武將と云 續武家閑談

○松平伊豆守嫡子甲斐守源頼朝督あり後ハ陣小屋地盤の具  
こら中へきむのぶ士へ下をせられり武功は法物既  
より譽つるハ総トク源派あはれお信ありなり地盤は小  
屋ハ無用なるべとやす源頼朝かきひて一通りハ花の子

是とも清南地ハ他國と違ハ其火多き云なり其外由上洛  
日光寺集すは傳中舊本の管由先番お物い常々大名  
多く由傳セバお申ハ大なる陣するべし其時番下切腹  
ある小屋を用ふる時見分しよらんらん為まればお世は  
とくの積ををひく少く多く支度せりて申付る志のふよ  
寛文のけしめ日光寺登山よそ新石宿由因めハ酒井家お物  
められりともつるは係は麻痺をともつらいつくせられ替り  
急よ申受もは依付らるるそをも今日明日と申すは  
なれば坊前の交代晝夜の差あましそをなありて甲斐  
さよハのひそく用立ありて小屋をとも違は持来りたるゆ  
えよあるこころは小屋れあといふちまら切腹小屋を掛

一々平日此心かけも配はるごとく人々耳目を起せらる  
一々り 明良洪範後編

○出家の輩もハ公儀より由沙汰も頼みたりされども其世を子  
分が一ツまで山城の洛中洛外むらりよても五六十年以來  
能大小をなりて一年此も此修理建立内中をとりて三  
千貫目づ入庫きこと申すはよつえあるもハつても此と申  
分よて子費目二千貫目ほどづいらぬ年ハあるはよて  
百よハ本教寺の大佛此由室のもどく申振あるが出来仕  
由のよ大なるやうにハやそそども尚年東山よ立は新  
年さ入すさくは此のい子費目ハ入庫きこと申すは二ニケ寺  
寺所田中よ立はし合て子費目ハ入庫此三四ヶ寺此入

用をりりよりくも二十万石餘此城下此士屋敷ハ不修修理志  
 五十年心堅固あるやうなる窟くい然ハ山城此もよ  
 五子費目づハ毎年入つそりよ此つそりを以て江戸大坂  
 諸国の多少をすらし一年此堂寺の入りよてハ二十ヶ所  
 此士屋敷ハ堅固あるくハ二子よてハ國々よてハ五ヶ所  
 此の年よてハ天下此町人る姓此迷惑人の家のこらず修理  
 するづくハ右ハはそりよきよのがつそりてハ是日よの影  
 費のそれが日よきよのよてある年ハ五六十きよる天下  
 をとりくづハハ日本のはらきよいハども五六十きよる  
 よひハと表は仕はるたよ其外の費ハ尤有道の世  
 へハたささくあがらくらべてハ日づなるこらりいとそり

火きえんとて光ますおとく佛者此算糸極て亡ふ時  
 至里傳ま吉利支丹の由穿鑿出来て佛者の奢いやや  
 となり屋僧来りて大寺多建のゆぬ君臣ともり仁君  
 忠臣よて由望いハども此一の乗除此理をあさりたりハ此来  
 一ハ世の中此ははくづきやハたけいむり大道心身我  
 此僧あ甲て佛法再興の法を多てんこをよき一とると  
 りやや或虫よんえ侍り五百字此ハ此佛者此心ハらふ  
 せぬこゆえ知人あさこ見えハ 集義外書

○或時岡崎の由城下矢利の橋泚水よく流々まハ字述可掛者  
 神君被仰付まよ付すまよ宗老申被中上なるハ益て何七  
 存案此立いハこハ根の折るやを以て中上も存案此



又左様結ぶ事なれば不斗に此様棄つらむの事味くはあれ  
とあり(す)めあり古此様塚のせまきつ一つ此後ぞく仰ら  
せたる 同書

○享保十三申年三月七日社依出の由觸書

- 一 菑所
- 一 一掃所
- 一 元山王
- 一 永富所
- 一 小川所
- 一 猿樂所
- 一 駿河堂
- 一 飯田所

右屋敷より家作執焼等之由も修護すべしハ新親より普請仕  
い下向後業ぶきもよ仕百由也 武家秘要集

義云是ハ過年人家も建込りて火災の多めとて社由令之  
其もよ其ころ茅ぶきハ勿漏りら屋も有りと云んぬ

登一そハ右の場所ハみり新益全銀のつらうとなりて社  
下社末より一年より多く(令)たりともあいら屋社と  
おるるりあせまきと名義傳も一伝あり

○又上より少はあり一富宥の町人紀伊屋左衛門と云も  
社あり一上社中堂は普請請負より敷業此全をそふけて  
棄もふもよりきま此ゆえ並て目を附てならハ一故元禄  
十三年此夏評定所(出)て款い多るよハ只々ハ御用社留よハ  
中病者若生してハ湯仕交候中なる伊豆守大さよハ  
アそ町人社分として上を煙りむる奴うを湯治社社分ハ  
ちがハ我ホが祖与力う家来ども中まが社を社分づきこと  
有り然るよを歴く公用社評定の席へ預ひ出るやとハ大さ

る者老たりされしは子ハあり所用をもうけしはなる才分  
をハ其才分を存せしるよハある處より早走れは是なり  
才分を高くよりけしとありとて守舎中つけれはなり一座  
能成中心紀伊屋屋よ置て追送する人も多しつりよ伊豆吉  
備並に裁判ありし中一人ありし其後しつる子細や  
有る人長崎は用能となど好むはれし一向よゆるし  
をりありとあり後年より紀伊屋屋とて金利能成  
を此ゆえに終よハ金銀を失て一日も成らざるやうな  
りゆき隠匿の辨して人志らざるありとあり 明良洪範後編  
系云紀伊屋屋が跡ハ道中志考よあり宝永の百能  
ちりまをハおハ丁堀三町目までハたてて彼る居宅よ

○大 毎日けいまりて暮さし七人づまり暮をあらるよきり  
ちれハ家あるごとくありあたらしき暮をあらしとて  
乃ハむらへしとそそ此棄傷也ふべし正治年中ハを  
くそれ家也とろへ判替して津川又任しなり後享保十  
九年四月二十四日才ありしとす大坂よそも淀屋と  
いつる棄置者也外を業ありしとあり前車に置るを  
志するがら近世しし浅草屋前の市人棄傷は外も  
家絶えしありある一に悟むべし

○火災用心我七人七火災ハ他より来ると此もひて其用  
ををばすれしも自家より火災は出づる事ハありしつらぬ  
也此なり明和はたわらしや新井筑後守源君美の婿

孫源を所邦孝が家より火災被りり者も其美著述の書  
ともを庫に入建並るバ火災の時庫は火此いらんちとを  
きて其虫ともを持籠二つ子納め一着たり置てすハ火災  
といも一着もせて出れんと用立てて置りしが自家より  
火出て彼虫ども残らず焼失せり惜むべし予も事を信し  
置てせは焼入りきまれ自家の火災を置ておそひりらば  
ア一ぬるり自家の火を置るべきことなり 船艦訓

○大猷公此の時美の内奉所より出火し本丸迄上す時よ  
女中西丸へ移らせしよりふとき豆州下知しるハ此馬の内  
馬のうらとを置しと道をとどめて止ま中へさより中渡し  
くれ案内者ありて女中道よりふりあり 續武家閑談

○旅行此時かを者(つぎ)るらば方角を置きす案内お  
よび閑所のあるところをよ見有て休息すべくかくせ  
ゆき不時此強動失火木の時うらあるもの之 小窓閑記  
系云都下怒真の地は居住する者も祝駈の災多し右三  
條夷跡此若あよりうらす人々もておほむ此あるを  
殊にあらよつりし記す

○明暦四年所城回祿せしるも酒井定所を記存念して  
先格のおとく作に出る此所城を本此にめありしと  
作らる時ハ稲倉殿は若あを以て所屬未と送りせ其後  
公方家と稱せりしより車寄殿上の百上檀所帳産り  
法南かけ者る是ホハ室所殿の若あを以てはくすつらる

大廣習松林間ホハ伏見此所塚の橋ヲ作らる實傳の宣卷  
久植あどハ強倉此古風を跡しつくり改められお其外  
兼治年中彰造の所屬中々も此度むう一法ごとくはくられ  
とちつあぐ此矢倉多門あつてあり只橋をとり石  
垣此堤のくく天守のたさをかり明層以ありハのちりる  
諸大名此門あよ弱くやくとよく柵をぶごよこの中へ入る心  
性急の部役ありすく無量此墓とく由停止ありる  
改正武野  
爛談

○會津肥後正之江戸芝此下屋敷は海上をうけく亭をつく  
られたる家此傳安西ハ左衛門と云老々筆もなく武居  
一片此男ありられ正之の建が祠を用ひられりある日

勤番此時此庭を見せらる國はあらはる海此肥後源の満  
予をうけくはくられしを安西一切をめやけのむむむく  
もあるやと多づひらりとさ然らば存より中上屋敷此築  
山植此風流は多く此を養され害をあつめて多れしは  
る此為よハより此家あどハ江戸何事ぞくやて兵衛中ぞ  
もたす此書傳其外上洛をどりも會津より人数り  
よせらば小屋場ハつうこよたささづきや急は築山植  
込をららるをひふづきやといふは中ぞやありたり  
無量のまとをうたるとしてありく掃庭よりてなる 同書  
○松平伊豆守信濃若老中の時ハ世智弁なる所は此おなくそ  
ふま此ありなれども大器ハ人此志るとつらなり或時天

守の壁毎度風雨より多き北と北は修治此是代と志る  
むるむづりき見て伊豆書ありら此下壁より白土を  
用いよ修ても見ざる一りらと申付らるすこの所この志  
のびく一此鉄釘を本此便金式分とは服治の丸れ中  
を同ていよは所城れりおれはそ等たれあひひうか奈良  
物とく下これ此は服差の境も少練ふる丸れおれを  
釘より用い向は然るべ一腰の代る匹は是す是とらハ  
アよ用いよとくしりきて釘のあひ引さげらる 同書

○秋元但馬守喬朝あるとき水道此極あ交換するよ付て法  
人も難候一まは所物入るれば永代くらはるやうは仕り  
にあるべ一と相談ありは鉄かき書出ていこうなるあり

まりをくららばはびもこうのどを毒ありて用いづ一  
焼物此極をふせつらばくらず一永之の利便なるべ一  
と内談一但馬守も中々るは但馬守も中々るハ瓦此鉄ハ地  
震よおれそげくつて此造作むづ一かるべ一厚さ七  
寸の本を以てあ一らへるらば百年ハ朽づらばる年と  
一度改めらまんハ何れ所物入とつづき本此厚さ一  
ちある常本を用らまんハ亦て此換ふるべ一地此底は  
ど念入らるべ一瓦樋等用ありと申は生々る其年大地震  
一々るよすく一七破壊すく一と但馬守此泰候と人おと  
一威一々る 同書

義云諸役の錢るそろハ里澁よ云一文也一此百換る



り一甚ぶりらをるやいお此三人をめさし大切の鍵を頼  
り法外沙汰法限と内吐何れを三人とし迷惑を極め入志  
むらく有て九段言未政をあげあがり見ぐる一はり控口  
明け何あろるま張並一内稱美もあるべしと此のひしは  
内吐を承り内充至極はり外は不作法なる事とを少  
も不仕言子内ゆる一下はれべしと中をれを忠勝君くつ  
く一と笑ををぬひまきりまき何れ内吐しちる運と一 同書  
○家作ハ依きとす土蔵ハ東北西のうら多つ是す  
ひきとを才一とすべし戸口ハ東むさよとす戸ノ  
湯筆ハ高野大師の言を引て云家ハ崇高なるをあり火  
災の害をすぬれす若のひきく依きつる家ハ繁昌す

○て永えありととす東古此大師堂ハ後極あよひきく多  
きたるゆゑよ久しく火災をすぬるきたりと云東都下谷  
廣徳寺の門を明和九辰年此大火も七やけぶるハ全くけ  
ある層一續崎人傳云火はあひてハ倉より外は多此む  
これを一云倉を用るとす釣籠車繩をぐと口より是用  
層一も一開きて火あるときすさやうり水を汲層さうあ  
たる凡火は一鑑すらぞはよ戸をひらく層一久き時を  
火氣あそりて内より焼出すなり開田子云この大火八年  
申正月晦日京  
都の大火なり  
一と云江戸まきハ屋宅焼もつせハ其す倉よこの屋ま  
づ戸をせり開き水をあさやうくよひらくさりと云

或古老此いづるを火志づありそまよく戸をひらくを日乃  
戸を開くまと早々れ内よりそり多る火事發してや  
多るすつとあり火繼らハ中つ外より水をかけ火事を止ま  
す後戸をひらくがよしといひ予按ずふは風上よむ  
うひる戸口をまやくひらく時ハ風ふきいそくありこ  
る下風下れ戸口をひらきても節をのるづさういづれ戸  
をひらうぬ前より外より水をかけ火事を止ますべしといふ  
東武ハ春月ハより火災やす南風乾熱火を起す連  
日吹と云ハハより火災を起る處此地ハ宮なるも此  
に傳あるべしなり 延元祚さめ草

○流然乎云今此内裡はく里出れく有職の人は見せり

々るりいつくもあしとて己遷幸の日近くなりけるよ玄  
輝門院内院トク内院殿ハ櫛形穴ハ丸くてふちもなり  
そぞあてしと仰られ々るいふかりなり古史をえり此  
いつく木よてふちをうたりなれハあやまりよてなるさ  
せよなり云い美いそく大内廷造堂ハなるはら古代の所  
なりやう大なるぬすを飾具を飾すをいふれすありよや  
七飾里をなすを臺儀の基ひるれがかく仰ありしよや  
○美おふりむし解家大臣ハ家の門口より水を蓋舟  
木鉤數十を並て火災れ為し備ふとゆふ日本記に見下り  
蓋舟舟ハ今此水溜よて木鉤數十といふ今此蓋舟口此  
となるべしはらば蓋口を火災れ開りするふるきよめれ

子なりん前よりふるに怒華の地は住居せんりる中  
 つ防火は用定肝要あり土蔵はもとより防火才一は出と  
 されども竊者のたやましく建つべきは且をすまのれ  
 六など見落しあれを却て大なる過となり救みり  
 のく年するぬちともあり予はもと東台の小千坪余は別  
 荘は住居は進ばそれ空曠は所は木部屋を立て家の遺若  
 中へハ土蔵板をとり入きて此方の用定りしや  
 南簾は移居して人宗建止ぬせは外は用定の構へもふら  
 中へ土蔵も破れ多れば出さずしては、頼るよるして  
 の造定りて小庭の中は一石余七貯べき充たるる瓶をも  
 とらあれを土中へ埋め蓋せよハ板をとり其上へ板屋

根を蓋ひて天水を防ぎやうの外はそれはおろしきん  
 平たき鉄鉢、草釜を買ひてめて湯をとり水鉢とて湯  
 用とたし北為此時ハ右に瓶中へ家著すこをとり移す  
 となげいてきて右に鉄つをすするはれは、家族も鉄  
 く坊の外の外は入るをれして五十巻の巾着とつ七ツ程  
 とたやすく出入りなく近火のときあれをとり見  
 目にとりてろやすし、これハ竊者此土蔵ともつたべ  
 ハき箱は執心源一婦女子を衣服は執心源一志のれを二  
 七ツ七埋蓋は、方此土蔵よりあつく、竊者ある年表  
 増らんぬとて、将き用定ゆえとて、志なりぬ  
 ○頼宣の内隠居不内作子繩うらけは、ぬり此壁をり、此は

死を志すと達人とす六十はあやうき子のそつりあを  
するを自分を志らばるなり身と志らずて人を志るま  
とあるづりばと内言なり 紀州頼宣御言行録

○大河内金吾末を松平伊豆守実父なり金兵衛質素ある人  
て其あろ小才元も七玄園法くりもや大の一千石布ど  
れ元も法くりはとそ金吾末三石此身上も寄附とい  
ふ法くりもありととのや尚世を直系二百石三百石  
の元ハ中及ぶ与力家中士町も七醫師もを流人  
此用開の所人よのきらすみも七頭取もを此ハ  
玄園法くりと見えり 額波集

○薩州國分此城此門かやふきもとされありはとらる破損い

そりはよ付山田利安伊集院抱善龍伯様(中あがられは  
此城此門破損仕はる此岸修護れはひもよ小板ぶきよ  
仕中づくは他國より使者をくちあるも中いよ三ヶ國の六も  
此は存ふ此は此城門よやぶきもて八あすりいふよは  
とやられもま龍伯様助不せも八使者を遣はすかま  
らずあもるものも法らひもづくは尙國此地を數里  
通りよあるづくは志うらバニケ此大也此城門かやぶき  
もそ氣おそれも國民の風俗を見いへ八富ゆりえもあ大  
ち此仁政はがめもあつくされあもづくは肝要れとある  
よあそ事を法けやもべ小板ぶき結構よいもいといと  
民百姓法らるる國主此仕並よる一うらむと見やづくる

汗委のともろは筆をほけやぶぐりらばるゝとり筆をつ  
ち中おしくいそくはかやふきよきくろくろく一のるやういふ  
し伯はと有り 薩州舊傳集

○池田輝政卿姫路に城を住りしとさるる竹筒水志びく  
損とるゆゑ有司ともいふ世上よ水筒を銅をほけ  
るはと流し中の一度ありえいべいつまぐも損せぬお  
は儉約しもなるべくとをいれをそれ方ともいふとく一  
よそれといきて後れありふなるべれども今昔もと  
あら竹とハ大よ相違あるべしるとも世よつれてふるき  
をあらつとむるをよつらぬおと有あとお不さられくその  
儀やぬ思出草

○備前出雲郡中野は烈公の遊覧の地あり夏日暑を避くやと  
とをよつとよつらさぬひんまにれおり幕と串とをあらは  
おふぬし幕と糸と毛種を茶末れうよあてはつて  
ひらよて憩せぬふいさうれり東の地ぬ大の百り牛馬  
を牧せぬ公れいひををぬ地とて民ども敬きり旭川の  
東岸は花富といふとつらも清春公備藩に封せられおと  
し中へけるともこれ別業といふ陽月臺と名をいひたり烈  
公儉をあらと務ををぬいしおらむりこれ別業といふほち  
る美石をバミる地中よつめはをぬひなる公れおと  
里ぬよつて彫牆のぬれははぬをりし志をるをよとげ  
古は聖人の地へよるるはゆた 烈公遺事

○芳烈公由寇朝が得此垣を小作よりありありとるそくすあり  
あつらひき行きて善悪は仕由遠ありて費あるありとを  
竹此ききとら なるハ格あのおとかやうなるありとあり  
しきもれをばをちひすしきありとありと仰あり 有斐録

○酒井彌次忠勝様由冥冥未未とてつ所せいと存存はり  
毎くあまありは忠孝様由初入年れ年款々表も由巡見  
おれあまいそれ七つ山口在由東門名和由古夫教は由  
乃お初在由忠善様由入國以來とてと強はよ付由茶屋  
方橋換し修護とてとへいとあり由居るの原の地と  
いさおれ本ありとてと由喜此出格子の板とてと古  
板よてまへつと黒ぬり此ふる板とてとあらんをてつけ

下地のころぬり此とてとろまぐらよ残るありとをそれなを  
よそちひおれありいとなり先年山口治を由善清善の  
まき佐柳茶屋修護の常兵衛見分つていとありと  
此不の意本より古本より意おちる作よりいゆ急何故  
たやうよいやとやうをおるづつといハ隠分るきり意本  
作よりいよいやと忠勝様おせはけられ右の通より  
申はつていぬ佐柳の古きを此中いおれよよりて佐柳由  
修護丁寧におるむの治を由これとてつていよ  
とおれあまいおせをもの相考へといハ般登由茶屋作  
ゆおれと不也由言よて出来仕いそのとてふ一を由い由  
下地の由善清善の通り藤相よいゆえ忠孝様いらせられ

以常也作事をたすめ諸事丁寧は取法くらひいふと相  
なからずおれよよりそはひえをまがふと大いなる  
むい金く忠務様後来の棄と切ええられ儉約質素此  
いすめと後世よのまはれい象をありてくま存いり  
酒井空印

言行録

○青山幸利公尼崎初入此常山城本丸より馬より下  
させらる本丸此中橋をぬいてきふは生山城入あそそ  
はせいよりそは後山用金此穿鑿はれいと大なる永樂の  
銀鈔一袋をらてハ中産あくよりハ役人ども申あけい  
ハハそれゆ急よきびくハ儉約の坊げりよて本丸  
入ハいりせらるお二の丸ハ中堂をされいハ諸事質素

ハ中入をられいそのうち雪隠ハ飯やど中置ハ中堂はとよ  
ろを毎日由閑取ハ中かろひあそはは生山城の常之竹の  
子笠よりて中あそはは生山城ハ懐燭を中置てなはれ  
お油火よて中自中ハ中置ちるは生山城通ハあそは生  
よハあまり此あそゆえ中年寄中つせもつめ申あ  
けいハ中置引なは生山城初入年ハのやうハ中置はよ  
一説ハ中初入あり三度よて中置城のやうハあそは  
中とあり 青天録

○板倉周防も様京都より中集府に生あり中城より中下里此  
常下系ハ中老中様ご中置も此中置らハあそありハ周  
防も様中置も此色ハあそは古びハを酒井忠勝様中置

つけをいれぬ質素よなはせは義を貴きらまは地甲め  
トよていやく久くまかめを忍はと成遊をなはせ  
○いハ周防を振返回さるはをさるびいどそ京江大島  
まをり此用ハよるくいと成挨拶よていよりそはあろ  
ぬ質素の風俗をさるなるべしあり  
酒井空印  
言行録

○家康様大坂まで成城年あると二月伏見へはうはりな  
はせは落城以後急相成陣殿はよりまがと成殿よりはは  
いづうこより成とりよせなはせはやふるまもふるど成局よ  
あて中い天下成書極はてし成棄心すまもふるまもふるま  
い成天書ハ伏見へはうはりはさるく何アて後成るをはけら  
まはみみく成譜代成ハ成知り拝領すも成國へはうへ

なまの酒井宮内ど此牧野右馬進ど此津和搦平周  
そは  
と伏見よ成法は七天守その不の成普請成不はけら  
成骨折申成 聞見集

○井伊掃部頭為澤山より遠きよ成出なはせいと成ある侍の  
家法より志すくも成是たうやきへ掃部頭成此をな  
アい成成境なはれはハ百五十石と成侍より成此侍を  
成りさる成知り三百石よな成は成は成いと成きそのお  
不せや成は成よ成居んぐりくく人馬身成す  
きて成持威成成成りさる成山崎甲斐成か家中のやう  
よ成宅成のり奇成り自然のこも成成あるとよハ家  
よ成急てハ出られ成り成きとお不せられは成急成作分取よ

すきし、これを出首尾ありきやうなり、此輩はゆえ家  
作造様よりし、侍をさへるる、くお不えるなり、それ  
より家中の嘉志は、道齊聞書

○井伊掃部頭と此處根まで、内倉身上は、過ぐる家作、を  
出後して、亭主をや、き門の前は、吹び、何とそか  
やうに、大侮ある作事、は、是る、とて、もの、あ、り  
武器を、出、見、せ、く、し、と、申、は、一、馬、鞍、弓、銃、炮、槍、未、出、此  
○外、あ、や、と、あら、ゆる、武器、と、も、と、ま、い、づ、く、由、目、よ、の、け、ら、る  
掃部頭と、此、出、後、と、お、る、と、と、ら、ふ、き、次、才、と、そ、米、二、百、俵  
下、は、是、は、出、此、米、を、や、き、ま、へ、乃、大、道、は、是、と、お、き、諸、人、は  
見、せ、中、は、是、は、出、の、より、掃部頭、との、き、こ、せ、ら、是、光、なる

請やうを、いと、感、ド、は、せ、ら、れ、い、よ、う、其、の、後、解、人、作、事、  
あ、れ、を、き、よ、う、聞、見、録



